

中 入 り

闇下櫻人 番外編 其ノ二



あの時——珠沙華が雨月に『珠沙華』で胸を貫かれ、串刺しにされてから季節は巡り、秋。

春には満開だったしだれ桜は、今は橙色の葉をはらりはらりと落としている。

庭の木々も、しだれ桜と同じく朱に染まったもの、灰色に変わっていくものが、冬の近づく空に色を添えていた。その秋色を、珠沙華は縁側に座って眺めていた。それしかできないでいた。何故なら……

「よし、ゆつくり下ろせよー」

縁側に面した寝室の向こう、今はぴったりと襖が閉まっている珠沙華の書斎から追い出された為だった。

伊勢物語を読んでいたら、いきなり襖が開き、にやにやと笑った雨月に、用向きも告げられず背中を押され追い出されてしまった。

絶対入るなど言いながら、意味ありげな含み笑いを浮かべた雨月が襖を開けて、すぐ——どたどたと乱暴な足音が響いてきた。雨月の他にも何人か入って来たようだ。

重なって聞こえる威勢の良い声は男のもの。何か命じている者。それに従う者の声。

手早く箒をかける音に続き、ばさばさと大きな布らしき物を広げる音が白い耳に届く。

反物にしては重すぎる。畳を上げるにしてはしなやかすぎる。

初めて聞く音に思いを巡らせていると、重い物を運んでいるような気配も感じた。一体何をしているのかと考えを巡らせていたが、珠沙華は直ぐ飽きてしまった。

雨月の好きにさせることにして、ぺたりと縁側に座り込んだ。それが、三十分程前のこと。

千代は、最近お気に入りの白いエプロンをつけ、買い出しに出かけたところだ。

さるぼぼ達は、千代の変わりに彼女の弟達の世話をしている為、不在。

読みかけの本とともに追い出されてはいたが、興をそがれ、読む気は消えていた。

台所をさわる気にもならず、他の家事をする気にもなれず。

襦袢に適当な着物を肩にかけただけの姿では外出は難しい。きちんと身なりを整えていたとしても億劫に思っただろう。

となると、今の珠沙華に出来ることは、いつ落ちるか



からない落葉を眺めることだけだった。

三味線でも弾こうか。だが、書斎に置いてある。まだ襖は開く気配はなさそうだ等々漠然と考えながら、しだれ桜をじっと見つめる。

幹には、まだうつすらと残っていた。

刀が刺さった跡だ。

生まれて初めて味わった恐怖に狼狽えた雨月によって串刺しにされた珠沙華が、しばらくそのままの場所。時期はずれの桜が狂い咲き散り乱れる中、心臓を貫かれたまま、珠沙華は雨月への思いを語り、穿たれたまま唇を重ね、そして……

珠沙華の追憶を途切れさせたのは、軽やかに開いた襖の音だった。

左目を遣ると、満足げなような、得意げなような。褒められるのを待っている子供顔の雨月が立っていた。

「もういいぜ。入って来いよ」

あまりにも雨月が嬉しそうなので、珠沙華はわざと座り込んだまま小首を傾げた。

「そういうのはいいから早く、早く」

と言いながら、雨月は何度も手招きをしている。

その様子が面白かったので、わざとゆるゆる立ち上がる

珠沙華に向け、素早く仰ぐように雨月の掌が急かす。

鴨居横に顔が来る大男のそばへゆっくり辿り着いた美女の黒瞳こくどうが驚きに丸くなった。

「これ……」

「気にいつてたろ？」

喜びに染まり輝く瞳が、もう一度、それを見る。

ソファだった。

大きさは二人掛け。色は少し桃色のかかったベージュ。同色の糸で蔓草を華美に模した刺繍が精緻に施されている。フレームは焦げ茶の木製で、足はくると猫のよう。

その下には、藍色の縁が煌めく中東の絨毯が敷かれていた。内側の砂漠色にも、色艶やかで燦爛さんらんな蔦の意匠が施されている。

「こないだ知り合いになった奴が、倫敦ロンドンに精通してな。

そいつに相談したら輸入してくれただ。ま、タダじゃねえけどな。ソファを畳の上に置くつたら、痛むから絨毯も必須だつて言われてさ。一緒に買わされた」

単に在庫を抱えて困ってる奴がいて、押し売りされたのかもしれないけどと呟いている雨月の横で、珠沙華はまっすぐに伸ばした指と指を胸の前で組み、目をきらきらさせている。



「ちなみに、お前さんから貰った給金じゃなく、外で稼いできた金で購入したモンだ」

珠沙華と暮らすようになってから、しばらくして……雨月の元には、異妖者を退治して欲しい、敵対一派との抗争があるから助太刀して欲しいという依頼が舞い込むようになっていた。

仕事をひとつ成功させると、次も、また次もと仕事が依頼されるようになった。

依頼者の大半は、たっぷりふっかけても平気で支払えるヤクザ者ばかり。しかもまともな依頼ではない。相手の弱みにつけ込んでしまったく心が痛まないのいいことに、やや法外な報酬を雨月は遠慮することなく要求し、受け取っている。

今まで、『珠沙華』で異妖者を斬る条件で珠沙華から給金を貰っていた雨月だが、最近は金銭を貰わずに斬り、外で稼いだ金を生活費として渡し、この家で暮らしていた。恋仲の雇い主と雇われ者だったのが、今では普通の恋人同士の関係に変化していた。

「座ってもいいの？」

「おう。お前さんの物だ。煮るなり焼くなり好きにしな」
雨月が言い終わる前に、珠沙華はそっとソファに腰掛けた。

しつかりとしているのにふわふわと柔らかな感触が、珠沙華を受け入れる。

座面の上で軽く上下している珠沙華は、無邪気な子供の表情で笑っていた。

珠沙華が生まれて初めてソファに座ったのは、つい最近。雨月に連れられて入った銀座の洋食屋でだった。

そこは本格的な仏蘭西料理を食べさせる店で、二人は、葡萄酒で始まったフルコースすべてに舌鼓を打った。

その店は、内装も家具も食器もすべて洋風。

食事中、珠沙華が腰掛けていた椅子も上等な洋風で、とても掛け心地の良い物ではあったが、極上の座布団の上のようだとしか思えなかった。

その白いソファがあったのは、入り口からすぐのさほど広くはないロビーの一角だった。

入店時には目に止まらず、出る際には目に入るよう配置されていた。

無数のランプに燦めく、磨き込まれた黒い木枠の猫足を珠沙華が観察していると、英国から輸入された物だと燕尾服を纏った店員から説明を受けた。

会計を済ませにいつている雨月はまだ戻ってこない。



百雲日録

闇下櫻人 番外編 其ノ二



漆黒の夜空に灰色の雲が走る。

その向こうには十六夜。

煌々と照っている白い月の明かりは、格子を越えたその部屋にも入り込んでいた。

光が降り注いでいるのは畳敷きの部屋ではなく、土間。そこで白い明かりに橙が揺れる。炎だ。無数の小さな火の粉が舞い上がる。炉にくべられた薪が弾け、ぱちり、ぱちりと小さく軽快な音を響かせていた。

炉は常に熱く橙に染まっていた。骨張った職人の手が操る炎は、鉄を溶かし、鍛え、白刃を造り続けた。

真つ白で真つ直ぐな慈姑頭くわいあたま。頑固で偏屈を現すように常にへの字の口。すつと伸びた背筋。それが彼、神刀打ちと渾名される男の姿……だが、今は違う。

白と橙の斑光ふこうに浮かぶ刀打ちの姿は歪いびつ。

目は互い違いの大きさと、不揃いの瞳孔は絶え間なくぎよとぎよと動き、唇は捲れ上がり、顎は異様に突き出て、歯は半分以上抜け落ちていた。

白雪の頭髮は乱れ、ほとんどが抜け落ち、頭に歪な凹凸が出来、じゃが芋のようだ。

刀を造る為、それに必要なことの為、ずっと曲げていたせいか、固まり、伸びなくなった腰。

食事もなくに摂らぬ故みるみる痩せ、四肢が枯れ枝のようになり、腹だけが異様に飛び出ている。

皮膚も変色し、沈み込む黒影が目立つ褐色。

どれをとっても生きていないのが不思議な有り様だ。

かさかさの茶色に変貌した指が掴んでいるものは、紐閉じの冊子。

神刀打ちはそれを火先にかざすと……離した。

ぱさりと、深緑色の厚紙に挟まれていたそれが渦巻く炎の底へ落ちる。乾いた紙束をくべられ、ごうと炎の音が増す。それに重なり濁った悲鳴も。

炎の波に揺れている紙片は日録にちろく。

彼……逢梗桐百雲おうぎとうもくぐもがどのように変貌を遂げたかが綴られた唯一の記録。

炎が爆ぜる。紙面が黒く焦げる。悲鳴は響き続く。揺らめく陽炎に記されている文字が踊る。踊る……

○ ○ ○

千八百三十一年

その年に成立した爵位制度は諸外国対策とは名ばかりの、たった一人の本物の武士もののふを島流しにする為だけに作ら



れた制度だ。

ひやうこういんただおみ

白虹院忠臣——日本最後の真の武士と言われる漢。

ものふ

おとこ

彼を疎ましく思った幕府は、正當に見える理由をつけ、彼を武士ではなくす為、英国へ追いやることにした。

偏屈で物を語らぬ儂にも、武士として、一人の漢として接してくれた忠臣殿に何か出来ぬかと頭をひねる。

文献や長崎の出島、方々の港からわざわざ我が家を訪れた異人達の様子を見るに、日本刀を携えるのは、あの衣装と合わぬ。だが、忠臣殿の手に馴染んだ得物である方が見知らぬ土地で安心していただけるのではないかと、考えながら目を閉じる。

幕府主催の武術大会での忠臣殿の勇姿は瞠に焼き付いている。特に居合いの試合は素晴らしかった。

いつ抜いたかわからぬ刃。音ひとつない動作。

気づけば、目の前の巻藁に一筋。寸分のズレなしに平行に斬られたそれは、頷れることがなく、係の者が持ち上げ、すつぱりと切れていることを確認せねばならなかった。元々二つだったと巻藁さえも錯覚するのではないかと思うほどの見事な切り口に、全員が感嘆の息を漏らすことも忘れた。

忠臣殿は生まれる時代を間違われたのだ。関ヶ原に。桶狭間に。九州に——戦国の世にお生まれになっただけならば、

さぞかし名を残す武士として生きれただろうに。

そんな立派なお方を島流しにするなど幕府の者達は大阿呆だ。

刀を作ろう——忠臣殿にふさわしい刀を。島流しに痛む心を、孫娘殿を不憫にさせぬ為の決心を労る刀を。

武士としての誇りの一刀を——

千八百五十三年

独立し、貸本屋を営んでいる息子、陽芳のところに子供が生まれた。娘だ。儂にとっては孫となる。

様子を見に行く。嫁の茜さんによく似た、目が大きく、なんとも可愛らしい赤ん坊だ。

「実は父上に名前をつけていただけないかと」

相変わらずの静かな声で陽芳が言う。茜さんを見る。お願いしますと柔らかな声が続いた。

その場では浮かばず、近いうちにまたと告げ、陽芳の家を後にした。

造った刀の名はいくらでも思い浮かぶが、人の名となると勝手が違う。どうするかと道なりに歩いていると、河原に突き当たった。

目に飛び込んできたのは真っ赤な空。それを吸った川面。そして、真っ赤な土手。曼珠沙華だ。無数に。艶やかに大



輪の花を咲かせている。

火床で灼ける小炭と似たそれを目にした途端、浮かんだ。慌てて来た道を戻り、墨と筆を借り、書き記す。

——珠沙華。

陽芳も茜さんも良い名だと喜んでくれた。

「初めて表札を拝見した時からずっと思っていましたけど、お父様の字は本当にお綺麗ですね」

と、よくわからんことで茜さんに褒められた。

同年 冬に入るか入らないかの境

来客の姿を見て、一瞬、時が遡ったかのような錯覚に陥った。

いらしたのは昴子殿。^{すばるこ}忠臣殿の孫娘だ。

忠臣殿も共にいらしたのだが、妙だ。昴子殿に付き従っているように見える。

昴子殿は刀を造って欲しいと仰った。渡英される際、忠臣殿に渡したものと同じものをと。

忠臣殿の手を見る。以前造って渡した刀を持ってらっしやらなかった。

お二人の様子を見て何かあったのだろうと察したが、子細を聞くのも野暮かと思ひ、何より、白虹院家の依頼を断るのは本意ではない。承諾すると、僅か。昴子様の表情が

緩んだように見えた。

何があつたかは知らぬ。聞かぬ。ただ、造る。忠臣殿の為の刀をもう一度。

今、手にしているすべてを込めて。

千八百五十五年

流行病が江戸に蔓延る。^{はやりやまい}大勢死んだ。その中に陽芳と茜

さんも含まれた。大勢が出入りする貸本屋を営んでいたせいか、二人は早いうちに罹患した。^{りかん}

治るまでの間と預かっていた珠沙華は難を逃れた。

儂も珠沙華も。もう二度と陽芳と茜さんに会うことはなくなってしまった。

陽芳は一人息子。茜さんは天涯孤独。儂も、妻、親兄弟すべて鬼籍に入っている。

この世に残された身内は珠沙華だけとなった。

一人で。儂はこの子を育てる。

貸本屋で育った為か、珠沙華は平仮名もカタカナも読めるようだった。

小さな手に筆を握らせ、手を添えて。平仮名を書かせてみる。風車や独楽で遊んでいるかのように楽しそうだ。^{かざぐるま}



無薰の金花

闇下櫻人 番外編 其ノ三



さあさあと不規則に重なる水音の中、ちよつとした賭けに負けた雨月は舌打ちをするしかなかった。

霧のようだった雨粒は今では何倍も太くなり、雨月が雨宿りをしている檣^{けやき}の葉を叩き続けている。

空は九割方が灰色に染まっていた。うち一割は青空が覗いている。

異妖者退治の打ち合わせで訪れた依頼主の家を出た頃は、もつと青の割合が多かった。もう少し先にある最寄りの馬車鉄道の駅にたどり着くまではもつだろうと下駄を早く鳴らしていたが……

「目論見が甘かったか」

と言って、雫の垂れる前髪を無造作に後ろへ追いやった。晴れているのに降る雨——狐の嫁入り。

それなら、今は本降りでもすぐに止むだろう。今日はお帰宅するだけだから、のんびり待つとするか。と、雨月は黒い袂から紙巻きと燐寸^{マッチ}を取り出した。湿気の為になかなかつかない細い棒を何本か折り、やつと啜えている紙巻きに火をつける。

ふう。ひとつ美味しそうに息を吐いて、雨月はあるものに目をやった。

雨宿りをしている檣の隣。無数の小さな橙色の花をつけ

ている木——金木犀だ。

庭によく植えられる秋に咲く可憐な花が、天辺に神社のあるこの山の麓にも咲いている。それだけのことなのだが……

「おかしいな」

雨月は何度かすんすんと鼻を動かした。

始めは紙巻きのせいだと思った。それを地面に落とし、下駄で踏みつけ、煙を片付けてもやはり駄目だ。

「なんで匂いがしないんだ？」

雨に濡れるのもかまわず、雨月は金木犀に近寄った。花に顔を寄せてもまったく香りがしない。

蕾の頃から強い芳香を漂わせる花なのに、満開でありながら匂わないというのはどうにも腑に落ちない。雨月は銀製の眼帯に隠れていない右目を眇める。

「なんくんも見えねえけど、なんか感じるんだよね……」
好奇心に負け、ひょいと左の銀眼帯をずらす。その下の青い猫目で金木犀をじっくり眺めた。

「ああ、あった」

眼帯をシャラリと正し、六尺六寸の背を丸め、長い指で地面を掘る。

ややあつてカツンと固いものが指先に当たり、雨月はしつとりと笑った。

